広島大学大学院文学研究科　広島大学考古学研究室紀要　第９号、2017年、103～112頁。　考古学研究室紀要

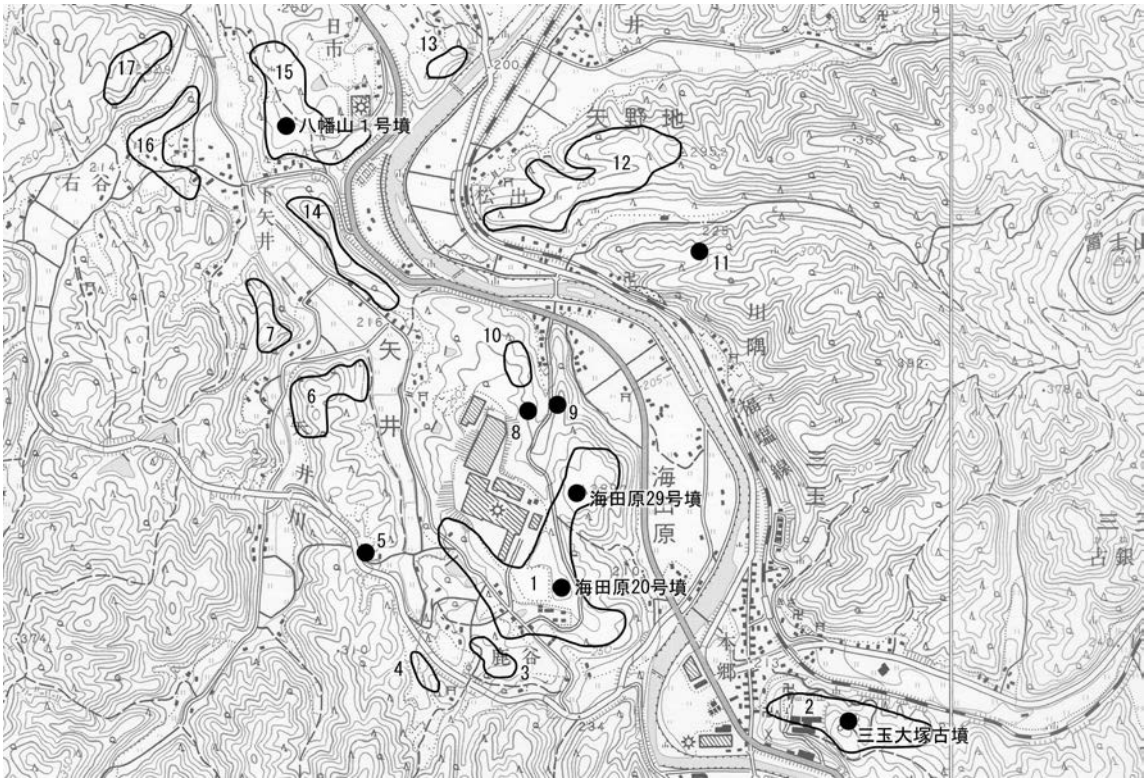
三次市吉舎町海田原20号墳の採集遺物

村田　晋

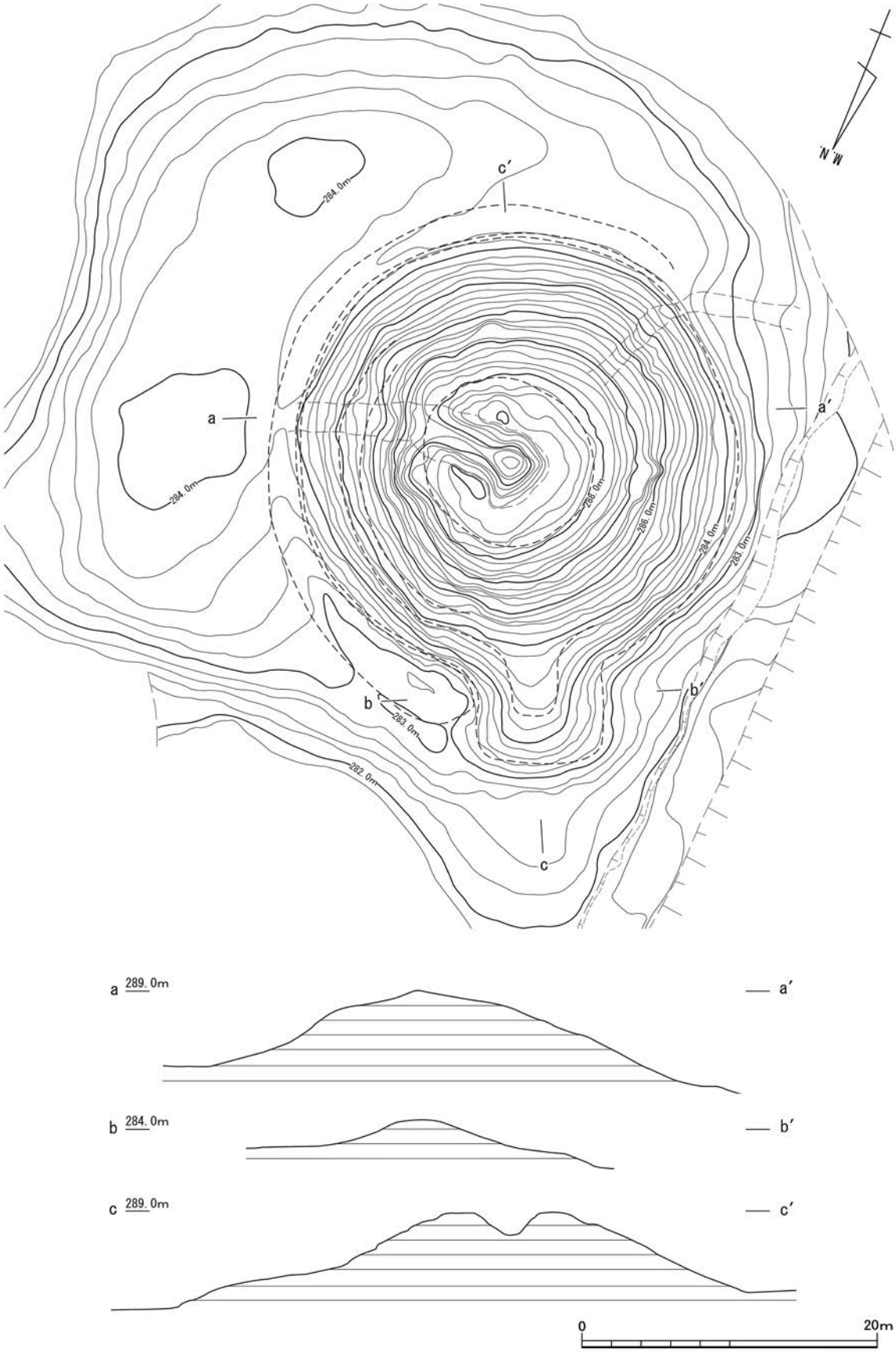
１．はじめに

吉舎歴史民俗資料館所蔵の海田原20号墳採集遺物について報告する。古墳は吉舎町内にいくつかある大型帆立貝形古墳の一つで、大学院生時代にその測量調査に関わり、成果を報告したことがある（村田ほか 2014）。当時は、採集遺物があるらしいことは知っていたものの、関係者に尋ねてもその行方がわからず、墳形を頼りに古墳の時期を推定するほかに方法がなかった。

平成29年初夏、弥生時代の遺物を目当てに吉舎歴史民俗資料館の資料を見せていただく準備をしていると、海田原20号墳の遺物もその資料館にあるかもしれないとの情報を得た。古墳の時期判断がやや心残りだったこともあり、若干の期待も持ちながら収蔵庫の中を見せていただくと、積まれたコンテナの中に混じって、件の遺物が保管されているのを発見することができた。長らく所在のわからなかった遺物を見つけ、早速、正式に資料調査を依頼することとした。



第１図　周辺古墳分布図（1/25000）（山田・渡邊 2015を基に作成）
１．海田原古墳群　２．三玉古墳群　３．後ロ山古墳群　４．宮前古墳群　５．岡ノ采古墳
６．矢井中山古墳群　７．下矢井南古墳群　８．長畑山古墳　９．殿平古墳　10．長畑山北古墳群
11．日暮目古墳　12．矢の地古墳群　13．田尻古墳群　14．中山古墳群　15．八幡山古墳群
16．下矢井北古墳群　17．明神山古墳群



第２図　海田原20号墳墳丘測量図（1/400）（村田ほか 2014より）

２．海田原20号墳の概要

海田原20号墳は、広島県三次市吉舎町海田原に所在する海田原古墳群中の１基である。かつては４号墳と呼ばれていたが、後年新たに番号が振り直され、20号墳に改められた。海田原古墳群はJR吉舎駅から西へ約0.7㎞の丘陵上に広がる。北流する馬洗川を東に臨む立地であり、20号墳はその中でも小丘陵頂部を占有する形で単独立地する（第１図）。古墳群の中でも最大の帆立貝形古墳として、近接する八幡山１号墳、三玉大塚古墳などとともに注目されてきた。近年測量調査が行われ、墳長約36m、墳丘高約５mの高塚墳であることが明らかとなっている（村田ほか 2014）。海田原古墳群では、29号墳が測量調査され、墳長約29m、６世紀中頃築造の帆立貝形古墳であることが報告されているほか（平尾ほか 2015）、尾道松江線建設に伴い発掘された24～27号墳の円墳４基が５世紀後半から６世紀にかけて築造されたことがわかっている（山田・渡邊 2015）。

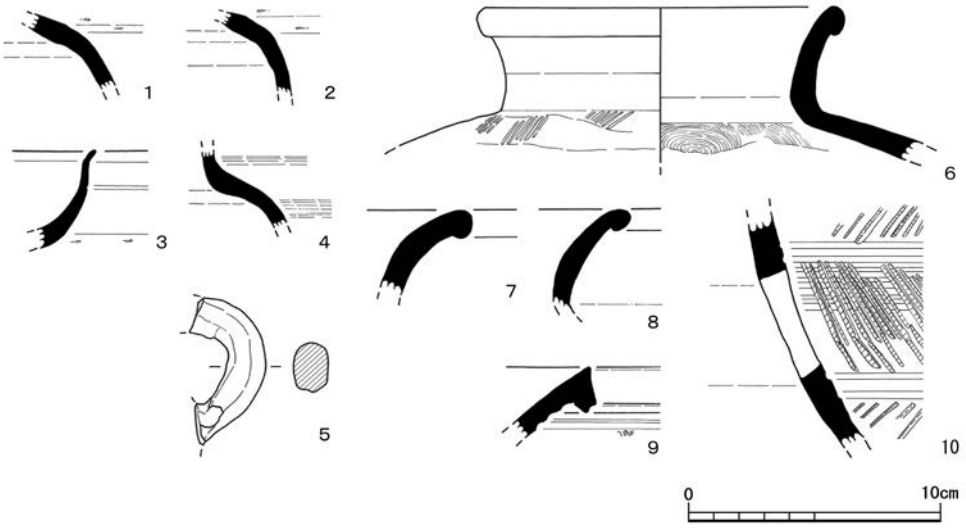
３．採集遺物の概要

採集された遺物にはすべて「吉舎海田原４号表採1983」の注記があり、1983年にまとまって採集されたことがわかる。埴輪と須恵器があり、多くは細片であるが、全体でコンテナ２分の１箱分程度の量が採集されている。今回はその中から、器種の判断や図化が可能なものを中心に報告したい。

埴　輪　細片８点が採集されている（写真図版１－a）。１～３は外面に粗いハケ調整がみとめられ、４は内外を撫でつけて平滑に整えている。すべて橙色を呈する埴質の個体であり、形象埴輪を含むと考えられる。剝離細片のため、正確な厚みや湾曲の度合がわからず断定はしかねるが、１～３が円筒埴輪であれば、１次調整の粗い縦ハケもしくは斜めハケを残す、川西編年Ｖ群（川西 1978）の埴輪と考えることができる。

須恵器　甕・壺類の体部が多いが、そのほかにも杯、高杯、瑳、把手、器台などがあり、周辺の帆立貝形古墳と比べて器種・数量は豊富といえる（第３図、付表、図版第１－b～４）。

１・２は杯蓋である。天井部から口縁部にかかる部分の破片であり、外面に沈線等はみとめられない。天井部付近には回転ヘラ削りが施され、その範囲は全体の３分の１から２分の１程度に及んでいると考えられる。３は無蓋高杯と考えている。口縁端部にかけて器壁が薄くなり、端部は屈曲をもって外傾する。外面には１条の沈線のほか、杯底部付近に回転ヘラ削りが施されている。杯蓋の可能性もある。４は瑳と考えられる。小型で肩部の張りは弱く、外面は強い回転ナデにより多くの横筋が残る。５は把手である。手づくね成形により作られている。碗、無蓋高杯、鉢、提瓶などの器種が考えられる。６～８は甕である。頸部は外反し、口縁端部が円く肥厚して蕨手状の断面形となる。８は幾分薄手で、比較的小型の壺か、横瓶や提瓶などの可能性もある。口縁部内外は共通して回転ナデが施され、肩部の残存する６は、内面は円弧当て具痕半磨消し、外面は平行叩き半磨消しにより調整される（図版第４）。９・10は器台である。９は口縁部で、端部は下垂して外側に面が形成されている。長頸甕の可能性も考えられる。下垂部分の下位には凹線文がめぐり、板による連続刺突文が施されて



第３図　海田原20号墳採集須恵器（Ｓ＝1/3）

いる。10は脚部で、凹線文で区切られた文様帯には、カキ目の上から、板を用いた連続刺突文が文様帯ごとに向きを変えて交互に施されるほか、三角形透孔が７㎝間隔で穿たれている。11～19は甕・壺の体部片である（図版第２－b～４）。叩き技法を駆使して製作されている。外面はほとんどが平行叩きで、わずかに格子目叩きがみとめられる。14は外面のある部分から平行叩きの方向が変化しており、内面も対応する位置で当て具痕の見え方が変化している（図版第４）。内面は、11・12など円弧当て具痕がないもの、６など円弧当て具痕を半磨消し調整するもの、17・19など円弧当て具痕を磨消さないものがある（図版第４）。今回掲載しなかったものも含めて、その比率は破片計算で順に12：16：35である。

４．遺物からみた古墳の築造時期

報告した遺物から、古墳の時期について考察したい。まず、杯蓋と考えている１・２はいずれも天井部に回転ヘラ削りが広く施され、天井部と口縁部の境に相当する部分の傾斜変換は比較的明瞭であるが、突線や沈線はみとめられない。こうした特徴は、陶邑 TK10～TK43型式の杯と類似している。４のように「なで肩」の瓹や、６～８のように短頸化し、断面円形をなす口縁端部をもつ甕（壺・瓶）や、９・10のように連続刺突文を施す器台は、陶邑TK10型式段階頃から、多くみられるようになる。甕･壺体部の内面調整の在り方については、同時期のものであっても部位や個体によって異なることが多く（図版第４）、時期的指標とするには慎重になる必要がある。しかし、内面に当て具痕を残さないものを含みつつ、内面当て具痕を磨消さない粗雑な作りのものが多数派であることには注意したい。

個々の遺物の特徴に加えて、海田原20号墳は、墳頂部に派手な盗掘を受けながらも、周辺地域の帆立貝形古墳と比べて多くの須恵器が採集されていることが注目される。須恵器の多量副葬は、近接する長畑山北古墳群にみるように（新井 2015）、６世紀代以降に顕著となる。

上述の内容から、これら遺物の特徴は陶邑 TK10型式段階を遡り得ないことから、古墳の

築造時期も６世紀中頃を上限に、６世紀後半以降まで降る可能性が高い。

５．まとめ

三次盆地周辺の大型帆立貝形古墳としては、糸井大塚古墳、八幡山１号墳、三玉大塚古墳、酒屋高塚古墳といった５世紀代から６世紀初頭、古墳時代中期の例が注目されており、古墳時代後期以降の帆立貝形古墳の様相は不明瞭であった。しかし、海田原20・29号墳が６世紀代に築造されたことがわかり、古墳時代後期においても、高塚の大型帆立貝形古墳が築造されていたことが確実となった。

以前、海田原20号墳の築造時期について、墳丘の型式的特徴から５世紀中頃に位置付けたことがある（村田ほか 2014）。その中で、三次盆地の主要帆立貝形古墳の変遷を、八幡山１号墳→海田原20号墳→三玉大塚古墳→酒屋高塚古墳の順と想定した。いかにも整合性のとれた変遷想定案を提示したつもりであったが、今回報告した遺物の内容からは、海田原20号墳の築造時期は酒屋高塚古墳よりもさらに後ということになる。墳形のみに頼った時期判断の危うさを痛感している。

今回の報告にあたり、三次市教育委員会に未発表資料の掲載許可をいただきました。資料の所在に関して、同教委の桑原隆博氏から情報をご提供いただいたことで、成果に繋げることができました。また、同教委の友廣美和氏には事務手続きなど、お手を煩わせました。吉舎歴史民俗資料館の青木晃子館長には、館の一室をお借りしての調査をご快諾いただき、色々と便宜を図っていただきました。広島県立歴史民俗資料館の葉杖哲也氏、向田裕始氏には、須恵器の時期について相談に乗っていただきました。末筆ながら、記して感謝申し上げます。

引用・参考文献

新井真吾　2015 『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（41）　長畑山北第１～６号古墳』公益財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書第69集、公益財団法人広島県教育事業団。

川西宏幸　1978 「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第２号、日本考古学会、1～70頁。

白石太一郎ほか　2006 『年代のものさし －陶邑の須恵器－』大阪府立近つ飛鳥博物館。

田辺昭三　1981 『須恵器大成』角川書店。

中村　浩　1981 『和泉陶邑窯の研究』柏書房。

中村　浩　2001 『和泉陶邑窯　出土須恵器の型式編年』芙蓉書房。

中村　浩編　1995 『須恵器集成図録』第一巻近畿編Ⅰ、雄山閣。

平尾英希ほか　2015 「三次市吉舎町海田原29号墳の測量調査」『広島大学大学院文学研究科考古学研究室紀要』第７号、広島大学大学院文学研究科考古学研究室、93～108頁。

村田　晋ほか　2014 「三次市吉舎町海田原20号墳の測量調査」『広島大学大学院文学研究科考古学研究室紀要』第６号、広島大学大学院文学研究科考古学研究室、103～115頁。

山田邦和　2011 「須恵器の編年　①西日本」『古墳時代史の枠組み』古墳時代の考古学１、同成社、146～159頁。

山田繁樹・渡邊昭人　2015 『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（39）　海田

原第24～27号古墳』公益財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書第67集、公益財団法人広島県教育事業団。

付表　海田原20号墳採集須恵器観察表（※実測図掲載分のみ）

番号	器種	内面調整	外面調整	色　調	胎　土	焼成	備　考
1	杯蓋	回転ナデ	回転ヘラ削り	内　灰白10Y7/1 外　〃	径0.2～1.0㎜の石英・長石含みやや粗い	やや不良	
2	杯蓋	回転ナデ	回転ヘラ削り	内　灰7.5Y5/1 外　灰10Y6/1	径1.0㎜の長石含み密	良好	
3	無蓋高杯	回転ナデ	回転ヘラ削り	内　灰7.5Y6/1 外　灰7.5Y5/1	径1.0㎜の長石・黒色鉱物を含み緻密	良好	沈線１条
4	甕	回転ナデ	回転ナデ	内　灰10Y5/1 外　灰白7.5Y7/1	径0.1㎜の長石含み緻密	良好	
5	把手	ナデ	ナデ	内　オリーブ黒7.5Y3/1 外　〃	径0.2㎜の長石・黒色鉱物含み緻密	良好	自然釉
6	甕	円弧当て具半磨消し→回転ナデ	平行叩き半磨消し→回転ナデ	内　灰白5Y7/1 外　灰7.5Y4/1	径0.2㎜の石英含み緻密	良好	復元口径14.0㎝
7	甕	回転ナデ	回転ナデ	内　黒10Y2/1 外　灰 N6/	径0.5㎜の長石含み緻密	良好	自然釉
8	甕	回転ナデ	回転ナデ	内　灰7.5Y6/1 外　〃	径0.5㎜の長石含み緻密	良好	壺・瓶の可能性有
9	器台	回転ナデ	回転ナデ	内　灰7.5Y5/1 外　灰 N4/	径0.2㎜の長石含み緻密	良好	凹線４条、板刺突 甕の可能性有
10	器台	回転ナデ	カキ目	内　灰7.5Y5/1 外　〃	径0.5～1.0㎜の長石含み密	良好	板刺突、三角透孔

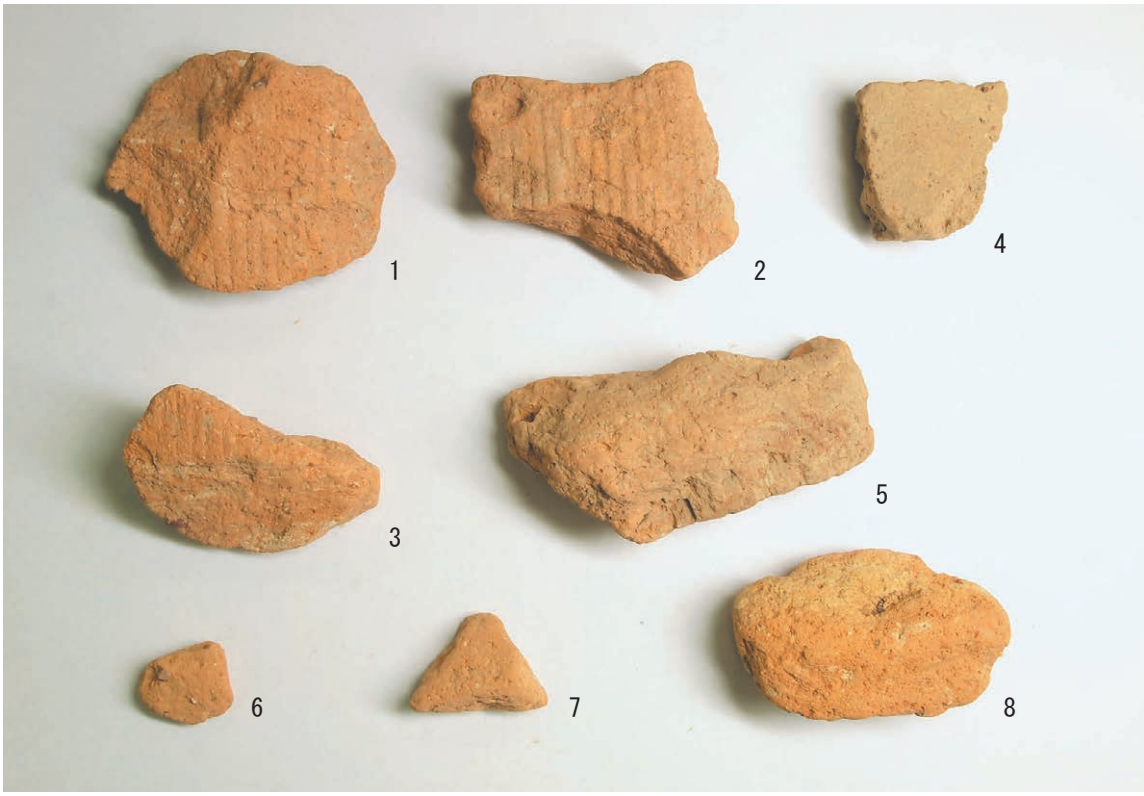
Surface Finds from the Kaidahara Mounded Tomb No. 20 in Kisa-chō, Miyoshi City

Susumu MURATA

The Kaidahara mounded tomb No. 20 is the largest burial in the Kaidahara mounded tomb group. It became clear, that the burial mound is scallop shell-shaped (*hotategaigata kofun*) and is about 36 meters in length and five meters high. A report on the artefacts collected from this site is presented in this study, The finds are all kept in the Kisa Museum of History and Folklore. They include Sue ware and cylindrical ceramic clay figures (*entō haniwa*). The Sue ware mostly consists of pots with bellied body (*kame*), kinds of jars (*tsubo*), but also dishes (*tsuki*), dishes with pedestal (*takatsuki*), vessels with a funnel-shaped wide mouth and a small hole in the spherical body (*hasō*), handles and vessel stands etc.

Previously, due to the characteristic mound shape type the construction date was placed in the middle of the 5th century AD. But one of the results of this study is, that the associated Sue ware is more consistent with a construction during the second half of the 6th century AD. Kaidahara mounded tomb No. 20 is an important example of a large scallop shell-shaped mounded tomb which was built during the Late Kofun Period.

図版第１



ａ．採集埴輪

ｂ．採集須恵器（杯・高杯・瑳・把手）

図版第２

ａ．採集須恵器（甕・器台）

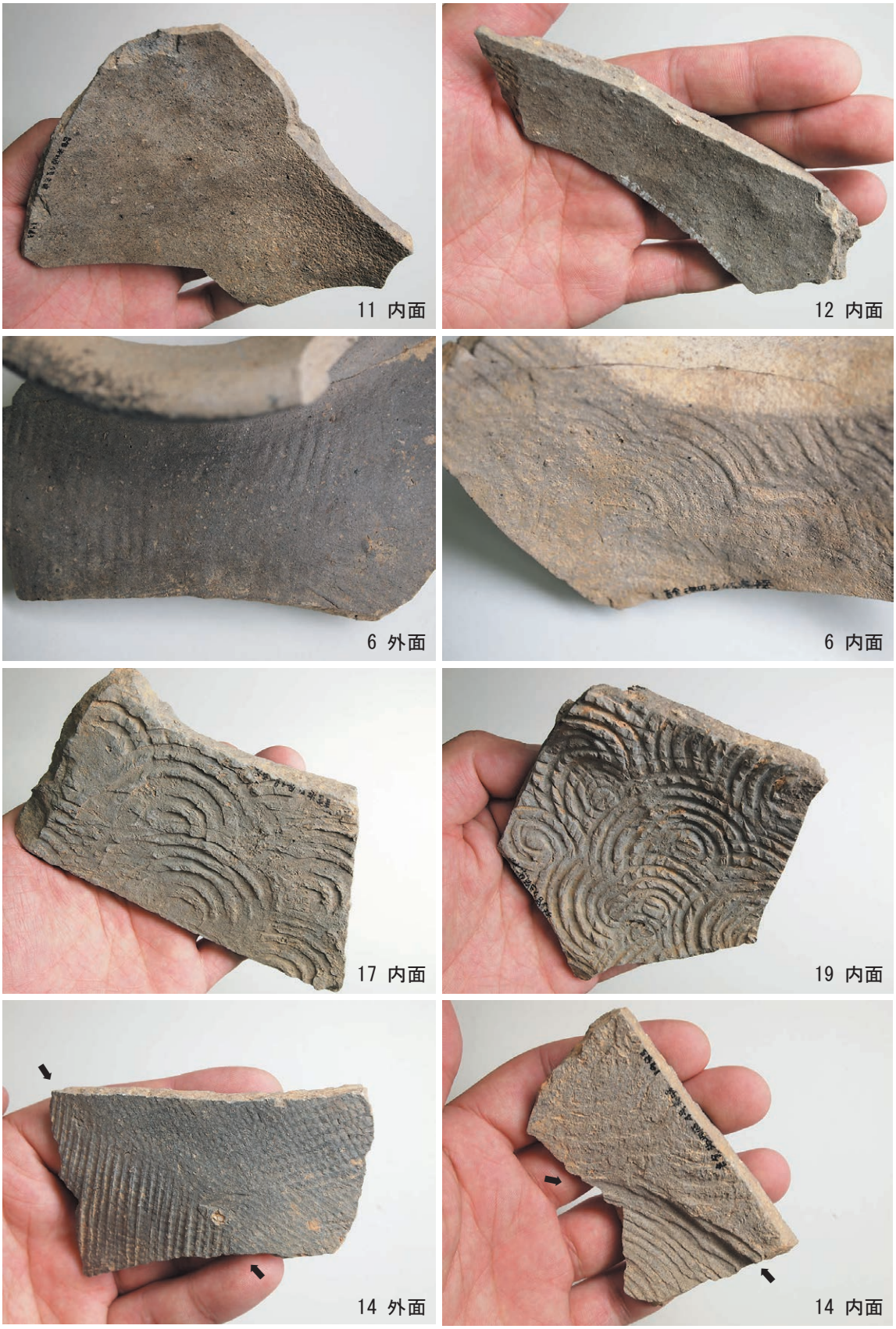
ｂ．採集須恵器（甕・壺）①

図版第３

ａ．採集須恵器（甕・壺）②

ｂ．採集須恵器（甕・壺）③

図版第４



甕・壺体部調整の各種